

冷戦・劣等意識・人種差別

——安岡章太郎のアメリカ留学——

一九六〇年一月から翌年五月までの約半年間、安岡章太郎はロックフェラー財団のクリエイティヴ・フェローシップ¹によってアメリカに留学した。拠点はアメリカ南部に位置するテネシー州ナッシュビル、受入機関は南部の名門ヴァンダービルト大学であった²。留学中の様子は『アメリカ感情旅行』（一九六二・二、岩波書店、以下『アメリカ』）に大部が記されている。

先行研究には、佐藤泰正『アメリカ感情旅行』（『解釈と鑑賞』一九七二・二）や磯貝英夫『反文明の旅』（『国文学』一九八〇・六）、金岡直子『決意の旅』（『昭和文学研究』二〇一六・三）などがある。これらの研究から継承すべき点は行論中に触れるためここでは措く。一方、問題点として資料の参照不足を指摘できる。

まず、財団が所蔵する資料³の参照が必要である。近年、財団フェロー制度、ひいては当時の冷戦構造におけるアメリカの対日文化政策に関する研究が進展している。財団フェロー制度に関する研究では、梅森直之、「ロックフェラーと文学者たち」(『Intellic-

安藤陽平

ence』二〇一五・二）、金志映「戦後日本の文学空間における『アメリカ』（東京大学大学院総合文化研究科比較文学比較文化コース博士論文、二〇一六・三）のような成果が提出されている。これらの研究が打ち出した新たな見解は、財団所蔵の資料を踏まえることではじめて可能となったものである。安岡の財団資料を用いて考察した例は金のみである。しかし金は小説を主対象としており、集中的に論じたのは阿川弘之・小島信夫・有吉佐和子である。安岡については、財団資料に記された基本的な情報が言及された程度と云える。

加えて、先行研究では『アメリカ』以外の留学関係文章が十分に参照されていない。記述量から言って、『アメリカ』は中心テキストとならざるを得ない。しかし、「大同小異」（『毎日新聞（夕刊）』一九六一・五・二六）、「私のみたアメリカ」（『新潮』一九六一・七）のような別種の留学記も存在する。留学から二年後の『ソビエト感情旅行』（一九六四・四、新潮社、以下『ソビエト』⁵）にも、アメリカとソ連の体験を通じた比較がある。この他、

回想や対談にも留学に関する多くの言及を確認できる。これらの留学関係文章には『アメリカ』だけでは知り得ない事情も記されている。金岡「決意の旅」(前掲)は、『アメリカ』と『僕の昭和史Ⅲ』(一九八八・九、講談社)を比較し、「差別を正面から描けなかった自己に對峙する挫折旅行」という留学の一面を析出した。『アメリカ』以外にも目を配る必要性を示す例である。ただし、『僕の昭和史Ⅲ』だけでは不十分である。

これら多種の資料を通じて、安岡の留学と冷戦の関係、アメリカ(人)に対する安岡の劣等意識、後の展開における留学の影響を明らかにすることが本稿の目的である。以下では、まず財団資料を中心に、安岡の留学と冷戦の関係を分析する。次に、アメリカ(人)に対して抱かれていた安岡の劣等意識を明らかにする。同時に、劣等意識の前景化は安岡の常套的手法であることに留意し、その手法が留学関係文章において孕む問題点を析出していく。以上の分析を踏まえ、同時代の渡米者との比較もおこないつつ、その後の展開における留学の影響を具体的に跡づけることで、安岡の留学を総括したい。

一 東西冷戦と対日文化政策

フェローに関わった坂西志保は、留学の規定を次のように述べている。

期間は一年間、数ヶ月合衆国に滞在するのが望ましいが、別に制限はない。ヨーロッパに行ってもよい。報告その他は一切要求しない。私が候補者を選び、ファーズ博士が面接して最後に決める(「解説」『ガンビア滞在記』二〇〇四・一〇、みすず書房)

「ファーズ博士」は、当時の財団法人文学部門部長であったチャールズ・B・ファーズを指す。坂西曰く、京都大学に学んだ経験も持つ知日派のファーズは、「民主主義の生活を打立てる」という課題に取り組んでいた敗戦直後の日本の情況に理解があり、「敗戦国の日本で創作活動に従事している人たちを一年の予定で海外に派遣することにしたといわれた」という(同前)。

日本の文学者に対するフェローが開始したのは一九五三年、世界は東西冷戦の最中であった。日本では、前年に七年間に及んだアメリカによる占領が解除されている。藤田文子「1950年代アメリカの対日文化政策」(『津田塾大学紀要』二〇〇三・三)は、占領を解除したアメリカにとって、「日本の独立と自主性を尊重しながら、どのようにして日本の共產化を阻止し、自由陣営にとどめておくか」が課題となったと述べている。財団フェローもこうした国家的要請に基づく対日文化政策としての一面を有していた。^⑥金「戦後日本の文学空間における「アメリカ」(前掲)は、留学記を発表する作家たちは「アメリカ文化の優れた紹介者」として、「[対日]文化攻勢の媒体としての役割を背負わされた」と

述べている。

自由主義／共産主義、あるいは親米／反米といった政治スタンスにまつわる議論は日本でも盛んであった。そうした状況下での渡米は政治的な意味を帯びる。ましてや安岡が渡米した一九六〇年は安保闘争が巻き起こった年であった。安岡は新安保に対しても意見を持っていなかったという。ただ、「安保反対の『攘夷』の声があふれている」時期に渡米するのは「億劫」であり、招待を受けるか迷ったと述べている（『僕の昭和史Ⅱ』一九八四・九、講談社）。新安保賛成、親米の表明として渡米が解釈される冷戦下の時代状況が、安岡の決断を渋らせていたのである。

冷戦は安岡が関心を抱いた人種差別にも影響していた。留学中、ナッシュヴィルの映画館における黒人の〈スタンド・イン〉を見物に行った安岡は、翌日の新聞で〈コミュニティ〉と報道されている。社会学者・河村望は、安岡の留学時期とも重なる一九六〇年九月から六二年の二月まで、ナッシュヴィルの黒人大学・フィスク大学に留学していた。河村『黒人大学留学記』（前掲）は右の一節に触れ、「アメリカでは、アカとクロを（中略）結びつけて考えるムードがある」と解説し、別の箇所では「コミュニティはニグロとともに、アウトローとして烙印づけられる」と述べている。コミュニティと人種差別反対運動は確かに関係をもっていた。しかし、自由主義陣営の総本山であるアメリカにおいて、コミュニティという呼称は蔑称として機能し、その属性を付与することによって人種差別否定派もまとめて攻撃されたのであ

る。〈コミュニティで悪ければ、ぼくは日本へかえる〉と安岡が憤慨せねばならなかったのは、冷戦下アメリカのこうした事情によっているだろう。

一方、安岡は「億劫」に思いながらも留学を決断した。その動機の一つに、W・フォークナーからの影響がある。財団所蔵のフーズの日記には、「安岡はフォークナーに同じくミシシッピへの滞在を希望した」とある（CBF TRIP DIARY 60, 4, 10）。フォークナーについては『僕の昭和史Ⅱ』（前掲）にも回想がある。フォークナーが訪日した際、「日本人諸君の苦しみはよくわかる、われわれ南部の者も同じく戦争の敗者だからだ」と述べたのを覚えていたのだという。南北戦争とアジア・太平洋戦争という違いはあるが、アメリカ南部と日本は「敗戦」という共通項を持っている。フォークナーが示したその見解が、安岡の南部に対する関心を惹起したのである。

フォークナーは一九五五年八月一日から三週間、文化使節として訪日した。藤田文子『アメリカ文化外交と日本』（二〇一五・四、東京大学出版会）によれば、フォークナー訪日には、アジアにおけるアメリカの文化的威信を高めること、増大しつつある反米主義を鎮めることが期待されていたという。その目的が達成されたかはさておき、フォークナー訪日は少なくとも一人の日本の作家の心を掴み、渡米の動機を形成した。安岡の場合、留学が可能となったのみならず、その動機にも対日文化政策の影響が認められるのである。

ただし、すべてをアメリカの操作による結果とするのは性急である。留学動機には安岡の主体的な意志も看取できる。「後書」〔安岡章太郎集3〕一九八六・九、岩波書店〕では、先のフォークナーの発言を引き、「私の内心にあるモヤモヤとした敗北感を、明瞭にアリノママに体得して、自分自身の中途半端なものを何と化した」かったから南部を選定したと述べている。安岡は一九四四年三月に学徒動員によって徴兵され、病を得て翌年三月に内地送還、敗戦時は東京にいた。敗戦直後は占領軍接収家屋の留守役に就いていた時期もある（四七年から約一年半）。それらの経験から内面に蓄積され、敗戦後一五年を経ても依然として蟠る「モヤモヤとした敗北感」¹²。その内実を究明したいという意志が安岡に南部を選ばせ、留学を決断させたのである。

二 劣等意識と英語運用

『アメリカ』は（ある劣等感）と題された章で幕を開ける。その劣等意識に「モヤモヤとした敗北感」が関わっていたことは疑念の余地がない。留学の動機となった一方、敗戦体験は留学中の言動にも明らかな影響を及ぼしている。

その一例が英語運用である。留学を語る際、安岡は随所で自身の英語運用の拙さをこたわっている¹³。その拙さが偏に語学力不足によるのではないことは、安岡と野坂昭如の対談「日本人と英語コンプレックス」〔英語教育〕一九七六・七）に明らかである。

野坂は「ぼくらが英語を使うときは、間違っちゃいけないという気が先に立」つが、「香港へ行つて片言の中国語を耳にしちゃうと簡単にしゃべれるんですね。だから文化の度合いというか、香港と日本と比べて香港のほうが低いということは全くないんだけど、こっちのほうが少し優位性があると堂々としゃべることができる」と述べている。安岡はこれに同調し、チェコスロバキアでは「神のごとく英語ができ」、「フランス人なんかと英語をしゃべる場合、ぼくよりもできない相手だと、これは楽にしゃべれ」と述べている。

二人の発言は僅かにすれ違っている。野坂が、使用する言語（英語、中国語）とその言語を母語とする国の文化に対する日本の優劣を問題にしているのに対し、安岡はあくまで英語を想定し、誰に対して英語を話すかを問題にしているのである。この発言に基づくならば、留学中の英語運用の拙さには、アメリカ（人）に対する安岡の劣等意識が介在した可能性が想定される。時代背景から言つて、いわゆるアメリカ・コンプレックスと呼ばれるような、敗戦・被占領体験に基づく劣等意識がまず思い浮かぶ。

敗戦体験に由来する劣等意識と英語運用の関わりは、『ソビエト』（前掲）に明確に記されている。ソ連へと向かう船上で安岡は、「船員がわれわれを見る眼つき」が「パン・アメリカン機のスチュワードの眼つきとはちがう」と感じている。これはあくまで安岡の一方的な認識であるとされる。アメリカでは「白人に対

する劣等感のようなもの」が「無意識」のうちに芽生えるが、ソ連ではそれが無いのだという。加えて、『ソビエト』『七月七日』には次のような一節も確認できる。レニングラード内の公園に設置された日露戦争の記念像を見て、「愛国心」について語った箇所である。

この国へ来て、われわれが何となく安心した気持ちでいられるのは、心の底のどこかに「日露戦争」の勝利がのこっているからではないだろうか。私はアメリカ婦人の英語の発音にしばしばネコの鳴き声に似た *meow* のひびきを聞くと、一種の脅えと心理的動揺を禁じ得ないのは、単に私の英語に關する劣等感のためばかりではないにちがいない。

すなわち、自身がアメリカ婦人の英語の発音に脅え、動揺するのは、〈私の英語に關する劣等感〉のみならず、それが自分たちの国を打ち負かした戦勝国民から発されるためだ、と安岡は述べているのである。戦勝国民の英語話すは、安岡の「愛国心」を傷つけるのである。

被占領体験については先の野坂との対談でも触れられていた。「日本はアメリカに占領されたでしょう。ほくは兵隊ですから、帰ってきて向こうのやつと英語をしゃべらないかぎり食えなくなるんじゃないかしらというふうな気持ちはどこかにあつたね。劣等感というのはあの辺からが多いかもしれない」(「日本人と英語

コンプレックス」前掲)。敗戦を機に、それまで使用禁止されていた敵性語をかつての敵性人に対して用いなければ生存が危ぶまれる可能性が浮上した。現に安岡は、一家の財政難と自身の病から占領軍接収家屋の留守役に就かざるを得なくなり、アメリカ人と「英語をしゃべらないかぎり食えな」い体験をした。しかし、人々の心情はそう簡単に切り換わるものではない。安岡の劣等意識は、敗戦とそれに続く被占領体験によって引き裂かれた結果生じたものであるのだ。

以上は渡米前の体験に由来するものであるが、これらとは別に、留学中にも安岡は劣等意識を抱かせられる体験をしている。人種差別である。

一九六〇年前後のアメリカは公民権運動の隆盛を迎えていた。もつとも、差別を肯定する白人も存在し、運動が長きに亘る闘いを強いられたことは周知の通りである。安岡が留学したヴァンダービルト大学は白人大学であったが、留学の前後、同大で黒人学生卒業を認めずに退学させる出来事があった¹⁴。安岡は、こうした騒動の前後に留学したことが「一番不運だった」(「アメリカ文壇瞥見記」『群像』一九六二・三)と述べている。教授陣もまた差別肯定派と否定派で二分されており、安岡が籍を置いた英文科は「黒人差別派の中心」(同前)であった。「職員室のまわりには有色人種である私には近よりがたい雰囲気があり、教授たちは外来者にかたくなに心を閉ざしてゐるやうに思はれた」(同前)。留学記では、安岡の担当教授であったR教授が排他的な人物と

して描かれている。安岡が住居探しについて助言を求めた際、教授は「(そういうアパートも家庭もここにはない)」と突き放した。I君がすぐに住居を見つけたことから、その言葉に虚偽があることは明らかである。他方、I君が探してくれた住居の家主に「日本人は部屋を汚くする」と偏見を述べられた安岡は、「R教授がアパートを探してくれようとは言わなかったわけだ」と「ある感慨」を抱く。阿川尚之「安岡章太郎のナツシュヴィル」(『外交ブオーラム』一九九九・六)は、「R教授の言葉といい、家主の発言といい、安岡はそこに日本人に対する差別を感じ」たのだとしている。確かに、留学関係文章のあらゆる箇所にも安岡の被差別意識を見ることが出来る。安岡の尋常ならざる「自意識の強さ」(阿川「安岡章太郎のナツシュヴィル」)前掲が災いした結果かもしれない。『アメリカ』「はしがき」には、「(見ていると同時に、自分が見られているという意識から、ほとんど片時もはなれられなかった)」とある。こうした過剰な自意識は先述した敗戦・被占領体験に裏づけられたものでもあつたらう。

「フアーズ宛坂西書簡 61.8.14」では、帰国後の安岡の様子が報告されている。坂西曰く、「言語の難解さは克服不可能とわかり、大学職員の助力もなく、町の人々は東洋人を平等な人間として受け入れてはくれなかった」との苦悩を安岡は漏らした。本節での分析を踏まえて言えば、敗戦・被占領体験に由来する劣等意識に、現地での被差別意識が加わって劣等意識が強められた結果、「言語の難解さ」はより深まっていったと言える。

ただし坂西は同書簡において、現地のマナーを理解せず人々を怒らせたことなどを聞いたとして安岡にも問題を見ている。先行研究でも、留学中の言動、あるいは安岡の創作手法に対する批判が提出されている。小島信夫「安岡章太郎」(『群像』一九六四・一)は、自己を卑小化して描き相手を諷刺する安岡の才能を認める一方、時にその手法によって「真実」が失われることがあるとする。「(そいつがかんじの悪い野郎でな……)」と安岡が旅行中に会ったアメリカ人について語るとき、先方もそう思ったのではないか(同前)。安岡の諷刺が、他者への思慮を欠落した一方的な主観に終始する場合があることを小島は指摘したのである。

先述したR教授は、財団に次のような文書 VANDERBILT UNIVERSITY 61.1.26 を提出している。それで教授は、「私たちは本当に安岡に対して協力的になろうと試みた」と述べている。R教授によれば、安岡が教授の開講するクラスに出席した際、歓迎し、出席を継続するよう促したという。しかし安岡はそれ以降ほとんど出席しなかった。教授は「彼の英語は全く流暢でなく、彼はどちらかといえば臆病な方だ(傍線ママ)」とも記している。

先の安岡の叙述とは矛盾する報告である。この矛盾には、小島が批判した安岡の手法が関わっていると考えられる。英文科が差別肯定派の中心であったことは事実かもしれないし、実際に安岡は差別されていると感じたのであろう。しかしR教授の記述に基づけば、教授は色々手を尽くしたにもかかわらず、安岡が一方的に拒絶したのではないかと考えられる。いずれに非があるか

は問題ではない。教授の助力を受けながらも、一方的に教授の態度に責任を帰するような叙述を安岡がなしていないかを問わねばならない。被差別意識自体は疑えない。しかし、何でもそれに結びつけて劣等意識を前景化し、「真実」を埋没させてしまっているのではないだろうか。

だが、そうした手法がより大きな問題を孕んでいるのは他の箇所である。

三 〈黄色人種〉という言葉辞をめぐる

「君の探してくれた住居の家主に偏見を述べられた翌日、安岡は中国系教授T氏に夕食に招かれている。安岡は、〈アメリカへつくと早々、アメリカ人ではなく東洋人の家へよばれ〉たことに〈別の意味〉を見出し、〈このアパートでもそうだったように、われわれはやはりこの街で人種的差別を受けているのだろうか〉と自問する。被差別意識を強めていく様子が窺われるが、一方ここでの〈われわれ〉とは誰を指すのであろうか。安岡夫妻と読むこともできるが、T氏を含めそのパーティーに出席していた人々（T氏夫人のみ白人）、つまり東洋人や黄色人種といったカテゴリーが指示されているとも読める。

安岡がアメリカの人種差別を語った次のような一節がある。大学食堂で働いていた朝鮮人学生が、「汚い」といって学生たちから敬遠され、解雇された出来事について語った箇所である。

南部では料理や給仕は黒人の仕事とされており、われわれからみればふだんあれほど差別している人間に食物をつくらせ、それをテーブルにはこぼせているのは不可解であるが、彼らに言わせれば習慣であるにすぎない。それなら黄色人種である朝鮮人の手で料理を給仕させることを汚いと感じるのも習慣にすぎないというわけであらうか。もしそうだとすれば、われわれは彼等が黒人を差別している「習慣」も他人ごととして黙っているわけには行かなくなるではないか。

ここで〈われわれ〉が〈黄色人種〉を指していることは明白である。肌の色によって序列化する人種差別のロジックに則したがゆえに右のような表現になっているとも言える。そのロジックにとらわれていること自体が問われるべきとの見方もある。しかし注目したいのは、ここで〈黄色人種〉という言葉辞によって朝鮮人と日本人を同胞かのように表示していることである。言うまでもなく、日本はアジアを侵略し、植民地化してきた過去がある。特に朝鮮半島は日本の暴力的支配に強く曝されてきた地域であり、日本人による朝鮮人差別は今なお根強く存在している。同時代では、一九五二年のサンフランシスコ講和条約発効にともなう在日朝鮮人の日本国籍奪やその後の帰国事業、五八年の小松川事件などにその例を見ることができる。¹⁶⁾

安岡は軍隊時代に在日朝鮮人兵士への差別を目にしたはずだが、アメリカの人種差別を語るとその過去は後景に退けられ、

（黄色人種）として均質な集団であるかのように表示してしまう。その原因の一端をなすのは、先述の白人に対する劣等意識であろう。安岡は、右の引用に続けて約六頁に亘って自身の人種差別理解を披瀝している。白人に対する（黄色人種）からの告発といった趣も垣間見える、いささかヒロイックな叙述である。すなわち、自身も白人に差別されているとして、その劣等意識を媒介に人種差別に意見しようとする、その叙述からアジア民族の差異や日本（人）の暴力は欠落してしまうのである。

元々、安岡には日本の加害責任について意識的ではない傾向がある。P夫人に対する心情の在り方にもそれが表れている。一九四二年前後、P夫人はスマトラなどの日本の占領下にあった地域に滞在していた。安岡は（日本軍の占領下で苦しい目にあつてきたのではないかと想像しつつも、この人はわれわれと同じように戦争が苦しいものだということを経験してきている」として、帝国日本の被害者として自身を定位してしまふのである。

それは、「こんどの戦争で、おれたちがいちばんワリを食つている」（『モテない戦中派』『文藝春秋』一九五六・五）という、いわゆる「戦中派」的被害者意識の産物であるとも言える。しかしこれは安岡個人に帰せられる問題ではなく、より大きく日本の戦争責任論の問題として了解されなければならない。山田朗『日本の戦争…歴史認識と戦争責任』（二〇一七・一二、新日本出版）は、日本の戦争責任がまず戦犯裁判として追及されたことで、「戦争の後始末の不可欠の一部として、将来の日本社会と国際関

係を再構築するために必要なものである」という認識を抱きにくい状況が作られた」としている。そして、一九四五年から六五年頃までの戦争責任論は、「被害者・犠牲者として強く自己を認識している戦争体験者」による議論であつたと山田は整理する。さらに、中村政則『戦後史』（二〇〇五・七、岩波書店）は、極東軍事裁判以降の日本に「アジアの軽視」を指摘し、それは現在にも引き継がれている問題点であると述べている。例えば従軍慰安婦問題のように、アジアに対する戦争責任を先送りしてきたツケが一九八〇年代末から九〇年代に一挙に表面化したと中村は述べている。両論を踏まえると、当時の日本では——現在もであるが——加害責任の認識が希薄であつたと言える。中野好夫「もはや『戦後』ではない」（『文藝春秋』一九五六・一二）のように、「アジアの国々とも、決して戦争の跡始末は完全にすんでいない」と冷静に判断していた知識人も存在した。しかしそれは一般認識としては成立していなかった。戦後を代表する知識人である丸山眞男にも、日本の「帝国主義と植民地主義への感度のあまりの低さ」があつたことは、中野敏男『大塚久雄と丸山眞男』（二〇〇一・一二、青土社）が指摘している。安岡の叙述はこうした日本の加害責任認識に基づくものでもあるのだ。

一方、そうした戦争責任認識の甘さを一旦留保する必要があるが、先の独立引用は、安岡が人種差別に対する関心を強めた契機としても読むことができる。

当時、人種差別は日本でも多大な関心を喚起し、その見物を渡

米の目的とした者も少なくなかった。一九五八年に国務省の招待で二ヶ月間滞米した火野葦平は、滞米目的の一つに人種差別への興味を挙げ、「リトルロックに行つてみたいと考えていた」（『アメリカ探検記』一九五九・一二、雪華社）と述べている。火野によれば、日本からの渡米者は「みんなリトルロック行を希望した」という。財団フェローを受けた小島信夫はアイオワ州を拠点としたが、人種差別への関心から、レイジアナ州グランプリングにある黒人大学・グランプリング・カレッジを訪れた。金「戦後日本の文学空間における「アメリカ」」（前掲）は、「人種問題はロックフェラー財団のフェローらがこぞつて注目した」と述べている。南部への留学生は少数であったにしろ、一九五六年から約二年間、ナッシュヴィルのフィスク大学に留学した青柳清孝（『黒人大学留学記』一九六四・七、中央公論社）や、先述の河村望のような例も存在した。

しかし、安岡が留学以前から人種差別に大きな関心を寄せていたかと言え、決してそうは思われない。留学関係文章で留学の動機としてまず挙げられるのが、アメリカ南部と日本における「敗戦」という共通項への興味だからである。であるならば、安岡は現地の人種差別への関心を向上させていったと考えるのが妥当であろう。

そこで先の引用箇所に戻れば、安岡は、日本人と同じ（黄色人種）である朝鮮人への差別が白人の（習慣）に過ぎないのであれば、（われわれは彼等が黒人を差別している「習慣」も他人ごと

として黙っているわけには行かなくなる」と述べていた。（黄色人種）という言葉で日本（人）の暴力を隠蔽していることは強調して余りあるが、一方ここで安岡は、自分自身が発言していくべき、他ならぬ自分自身に関わる問題として人種差別を引き受けていると言え。ゆえに、この箇所から六頁に亘つて、自身の経験も交えた人種差別理解を披瀝していくのである。自己の問題として人種差別を捉える問題意識を現地で得たからこそ、人種差別に対する安岡の関心は向上していった。そしてそれは、帰国後の部落差別への積極的な発言を導いていくものでもあるのだ。

四 留学体験の影響——まとめに代えて

以上、留学を取り巻く冷戦、劣等意識の内実とそれを前景化する手法の問題点を論じてきた。以上を踏まえ、同時代の渡米者と比較しつつ、その後の展開における留学の影響を跡づけていく。

安岡の後に財団フェローで留学した江藤淳は、その記録「アメリカと私」（一九六五・一、朝日新聞社）を「適者生存」と題した章で書き起こしている。江藤の留学は、アメリカにおける「適者生存」の論理に則り、その「適者」となるための「挑戦」（同前）であった。渡米直後、体調を崩した妻の医療費を財団に請求したり、給費増額を願ひ出たりしたのは、まさしくそれがアメリカにおける「適者」の振る舞いだつたからである。

しかし、妻の誕生日パーティーを成功させようと奔走する挿話

など、その「挑戦」はいささか過剰で、滑稽にさえ見える。江藤は留学を振り返り、当時「アメリカという外国に対してある焦立たしさを感じずにはいられなかった」（『アメリカで旅行者が見るもの』『江藤淳著作集 続4』一九七三・二）と述べている。そして、そのようなアメリカへの過敏さは「戦争をして負けた」（『同前』）経験があるからだとしている。江藤は被占領体験にも触れているが、江藤にもまたアメリカ・コンプレックスが抜き難く存在していたということであろう。鬱屈として過ごした安岡と、「適者」たろうとした江藤。一見対照的に見える両者の根にあるものは実は同じだと言える。

もっとも、坪内祐三「アメリカと「寝た」と江藤淳は言う」（『アメリカ 村上春樹と江藤淳の帰還』二〇〇七・一二）、扶桑社）は、安岡と江藤とではアメリカとの向き合い方が根本的に異なるとしている。坪内によれば、安岡はアメリカと「そこまで深い関係をもたなくてすむからお道化している」。したがって安岡に真の劣等意識はない、ポーズだとする。一方、江藤はアメリカに「コミット」（『同前』）している。坪内の文章を読む限り、それは敗戦時の年齢に起因するということになるのだろうか（安岡は二五歳、江藤は一二歳）。世代論では語り尽くせないと考えられるが、確かに表面的に見れば、安岡と江藤ではアメリカへの関係の仕方は異なっているように見える。留学後にまで視点を広げれば、後年の江藤が見せた激烈な反米感情は安岡には見出せない。しかし、だからといって安岡がアメリカと関係を持たなかった、劣等

意識はポーズであったとするのはあまりに極端である。安岡の方法を相対化する必要性はある。ただ、誇張があるにしろ、彼のアメリカ（人）に対する劣等意識は否定できない。後述のように、留学後の展開を準備したのはその劣等意識でもあったからである。アメリカとの関係性についても、留学から八年後にアメリカを再訪して『アメリカ夏象冬記』（一九六九・一二、中央公論社）を発表した。『アメリカ人の血と気質』（一九七六・九、集英社）などからも、継続的なアメリカへの関心が窺える。その深淺は何を基準に測るかによるが、安岡なりの仕方ではアメリカに「コミット」したのだとも言えるのである。

リービ英雄は安岡との対談「喪失を書く文学」（『群像』一九九三・一六）で、安岡と同時代の渡米者を比較する際の重要な観点を述べている。リービ曰く、当時の渡米者は「日本には人種差別はない、あれはアメリカの問題だ」といって張っていた。一方安岡は、日本の部落差別に言及し、アメリカと日本との「比較の視点を必ず持とうとした」と評価している。

留学記で部落差別への言及が多くなされたわけではなく、存在を注記した程度である。その程度ならば、火野『アメリカ探検記』（『前掲』）や河村『黒人大学留学記』（『前掲』）などにも確認できるとは。しかし留学後の展開まで見据えたとき、例えば「差別 その根源を問う」（野間宏との共編、上下巻、一九七七・七、同・一一、朝日新聞社）に代表される積極的な部落差別問題への言動を展開していった点はその特徴をなしている。

『差別 その根源を問う』は、一九六三年の狭山事件とその裁判に抜き難く潜む部落差別をテーマに編まれた座談会集である。同書には、安岡が部落差別に関心を抱いた理由を述べた箇所が見られる。その一つとして、「近代社会が拡大した差別」（安岡・野間・高取正男、下巻所収）では次のように語っている。

ぼく自身が部落問題に関心を持った直接の原因は、アメリカで日本人が差別されていると思ったからです。それと、ぼく自身は白人に会った後で黒人に会うと安心する。安心する理由は何もないにもかかわらず。これはやっぱりぼくが黒人に対する差別感を持つてからで、ぼくはそのとき自分の内心で非常に恥じた。ただそうは言っても、何とかして差別感を取っていかなきやいけないというのは、日本人つまり日本語の通じる人たち全部が差別されてるからです。

ここでは二つの理由が述べられている。一つは、日本人がアメリカで差別を受けている事実である。留学記では〈黄色人種〉とされていたであろう箇所は、「日本人つまり日本語の通じる人」とされている。「何とかして差別感を取っていかなきやいけないというのは、日本人つまり日本語の通じる人たち全部が差別されてるから」という箇所から、安岡にとつてこの理由が重要であったと言える。ここには自身の被差別意識も含まれているであろう。安岡の劣等意識をポーズと一蹴できないのはそのためであ

る。そしていま一つは、自身が黒人を差別した経験である。『アメリカ』にも、〈黒人に対する優越心〉を感じ、それを〈恥ずべき〉ものと述べた箇所があった。部落差別への言動に繋がったという点から言えば、公民権運動など歴史的瞬間に立ち会ったこと以上に、留学中の差別された／した経験こそが安岡にとつて重要であったのだ。

リービが挙げた比較の視点は人種差別以外の観察でも発揮されている。フォークナーの示したアメリカ南部―日本における「敗戦」という共通項の観察である。一九六一年は南北戦争開戦から一〇〇年にあたる年であった。しかし、南部の人々が戦争と言うとき、それは第二次世界大戦でも対日戦争でもなく、南北戦争を指す共通認識がある状況を安岡は目にした。安岡は、「戦後」がそう簡単に終るものではないことを、何よりも明瞭に教えてくれたのは、このナッシュビルという土地や、そこに親代々暮らしてきた人たちであるかもしれない（『僕の昭和史Ⅲ 前掲』）と振り返っている。先述のように、北部と比較して少数ではあるが、南部を拠点に留学したり、一時的に滞在したりした日本人は存在した。しかし彼らの関心は専ら人種差別にあった。安岡もまた人種差別に関心を注いだが、一方にフォークナーの言葉が頭にあつたのか、南部と日本の「敗戦」、そして「戦後」を重ね合わせ、観察していたことがわかる。

安岡が渡米した一九六〇年前後の日本は、「もはや「戦後」ではない」との言葉が流行して数年が経過し、高度経済成長へ突き

進もうとしていた。安岡もまた、当時は「何年か前から、もう『戦後』は終わったと思いはじめていた」（『僕の昭和史Ⅲ』前掲）と述べている。しかし、留学で「戦後」が容易に終わるものではないことを知った安岡は、長い時間をかけて『幕が下りてから』（一九六七・六、講談社）、『月は東に』（一九七二・一、新潮社）を創作した。両作は留学以後の代表作であり、「昭和三十六年、アメリカから帰った直後」（『後書』『安岡章太郎集7』一九八八・四、岩波書店）に構想が開始された。ともに、敗戦後間もない頃の先輩夫人との不倫が、現在時において再燃するという筋を有しており、その現時は「もはや『戦後』ではない」との認識が広まりつつあった時期に設定されている（『幕が下りてから』は一九五七年前後、『月は東に』は一九六〇年前後）。すなわち、主人公にとって「戦後」を象徴する出来事が、「戦後」は終わったとされた時期に繰り返される筋になっているのである。平野謙「『芸時評』（『毎日新聞』一九六七・二・二二）は『幕が下りてから』について、『幕が下りてから、芝居ははじまる』というところに、この長編の趣旨は存する」と指摘した。「戦後」の幕が下りてからはじまる「戦後」、容易に終わらない「戦後」を描いたのが、留学以後を代表するこれらの二作なのである。詳細な分析は他日を期すが、南部での実見が両作に生かされていることは以上からも明らかであろう。

留学後の安岡の言動がアメリカを利用するものとなった可能性も考えられる。安岡が日本の部落差別を指摘したことは、それ自体

は正しいことではあるが、そうした内在批判は、人種差別はアメリカの「恥部」であるという当時の認識を訂正し、アメリカに都合よく作用したとも言える。そのように考えるならば、対日文化政策において安岡は確かに一定の役割を果たしたのであろう。

その一方で安岡は——恐らく安岡に限らないが——主体的にアメリカを観察し、後の文学的展開の肥やしとしていった。アメリカへの継続的な関心、部落差別への発言、そして「戦後」の再検討といった事柄は、アメリカでの体験を基にした、留学以後の主要なテーマである。文化政策の操作対象として機能した一方、自身の関心からアメリカを観察し、留学以後の文学的展開に役立てもいったのである。

注

- (1) フェローを受けたのは福田恆存（一九五三・九）、大岡昇平（同・一〇）、石井桃子（一九五四・八）、中村光夫（一九五五・六）、阿川弘之（同・一一）、小島信夫（一九五七・四）、庄野潤三（同・八）、有吉佐和子（一九五九・一）、安岡、江藤淳（一九六二・八）の計一〇名。

- (2) ナッシュヴィル以外には（ニューヨーク、メンフィス、ニューオーリンズ、アイオワ・シテイ、サンフランシスコ、ハワイ等に二、三日から十日間程度滞在しただけ）『アメリカ感情旅行』一九六二・二、岩波書店）とある。後述する財団資料の記録との相違はない。

(3) 『アメリカ』は「私のアメリカ紀行」(『世界』一九六一・九六二・二)を基に執筆された。IV章までが『世界』に発表された箇所である。後続の章は書き下ろし。

(4) 本稿における財団資料からの引用は拙訳による。資料は財団アーカイヴセンターのホームページ (<http://rockarch.org>) から請求することができよう。

(5) ソ連作家同盟の招待を受け、佐々木基一・小林秀雄・安岡の三名で一九六三年七月から九月半ばまで滞在した。

(6) 佐々木豊「ロックフェラー財団と太平洋問題調査会」(『アメリカ研究』二〇〇三・三)、松田武『戦後日本におけるアメリカのソフトパワー』(二〇〇八・一〇、岩波書店)なども参照。

(7) 後述する河村望『黒人大学留学記』(一九六三・七、弘文堂)は、「アメリカ行きが決まったから、もう安保のデモにいくのをやめた」と知人が述べたことを紹介している。ここでも渡米と安保が結び付けて語られている。

(8) 動機の一つとして人種差別への興味があつたことは『アメリカ』で述べられている通りである。また、安岡が財団に提出した *PERSONAL HISTORY AND APPRICATION* 60, 8, 17 には、「アメリカ南部における家族制度について研究したい」とある。『アメリカ』ではあまり言及されていないが、「大同小異」(前掲)には「アメリカ人たちが、その個人主義と肉親愛とをどんなふう処理し、あるいは結び

つけているかということ、僕の最大関心事の一つだった」とある。留学の前年、それまでの小説の集大成とも言える『海辺の光景』(一九五九・一二、講談社)を発表していた安岡にとって当然の関心であつただろう。

(9) しかし同日記には、ファーズも坂西もそれを「良いアイデアだとは思わなかった」とある。ファーズらはテネシー州スワニーのサウス大学を候補に挙げ、受入依頼も出している。しかし、大学近辺の交通網が未発達で、アジア系留学生もおらず安岡が孤独を感じる可能性を懸念され、断られている (*The Sewanee Review* 60, 5, 6)。

(10) フォークナー訪日の際、「日本の若者たちへ」というフォークナーの文章を掲載したパンフレットが東京で配布された。同文は、南北戦争における南部の敗戦体験を枕に、「南部出身のアメリカ人なら、もう執着するものも信じるものも無い、未来は若者たちに絶望以外の何も提供しない」という、今日の日本の若者たちの感情を少なくとも理解することができる(『フォークナー全集27』大橋健三郎ほか訳、一九九五・一〇、富山房)と説いている。

(11) フォークナーからの影響に関しては金「戦後日本の文学空間における『アメリカ』」(前掲)にも言及がある。しかし、金は「安岡の南部への関心が本質的な深さを持つていたとは思えない」としている。本稿四節で述べるように、留学が後の展開に大きな影響を与えたことから、決してそ

うとは言い切れない部分があると考える。

- (12) 創作でも、例えば「陰気な愉しみ」(『新潮』一九五三・四)では、アメリカ人の家族連れを見つけ、大人が背を向けた隙に子どもを睨んで「みるみる金色のマツ毛の間から眼球をぶよぶよととうるませる」のを愉しむ傷痕軍人の「私」の姿が描かれていた。杉本和弘「安岡章太郎のアメリカ」(『名古屋近代文学研究』一九九八・一二)が述べるように、そうした「私」に「支配者、優越者としてのアメリカへの、貧者としての、また「日本人」としての劣等感や屈辱感に由来するような、漠然とした敵意」を読み取ることができる。なお杉本は、「ガラスの靴」(『三田文学』一九五一・六)・「勲章」(『別冊文藝春秋』一九五三・八)・「科学的人間」(『別冊文藝春秋』一九五四・一二)・「サアヴィス大隊要員」(『新潮』一九五四・二)にも敗戦国民としての心情が指摘できるとしている。
- (13) 金「戦後日本の文学空間における「アメリカ」」(前掲)も指摘しているように、安岡の英語運用能力は財団からも懸念されていた。一例として、留学開始から約一ヶ月後、生活上の不便などを聴取するために財団がおこなったインタビューの記録 INTERVIEWS 60. 12. 23 に、英語を勉強するようファーズが安岡を諭したことが確認できる。
- (14) 『アメリカ』ではジムとされるこの人物がジェームズ・ロソンであることは、金岡「決意の旅」(前掲)が明らかにしている。彼はインドで宣教師を務めながらガンディーの思想に学び、帰国後はナッシュヴィルを中心として学生らに「非暴力」による抵抗運動を説いた。しかし、差別抵抗運動を指揮したとして一九六〇年冬に退学させられている。以上の経歴は *The New York Times* 二〇〇六年一〇月四日の記事に拠っているが、同記事にはヴァンダービルト大学が謝罪し、客員教授としてロソンを迎えたとある。
- (15) 「南部のアテネ」(『朝日ジャーナル』一九六三・三・一七)では「私自身も、色つき“人種の間人”として何となく肩身のせまい感じであった」と、「私と黒人問題」(『月刊社会党』一九六二・一二)では「とにかく常住不断、自分の肌の色を意識させられているというのは、それだけでもヤリキレない」と、留学中の被差別意識を記している。
- (16) 小松川事件は、当時小松川定時制高校一年であった李珍宇が殺人の疑いで逮捕された事件である。この事件を報道する記事や、李の生育背景にまつわる在日朝鮮人差別を述べた文献はいくつか存在するが、本稿では徐京植「怪物の影」(岩崎稔ほか編『継続する植民地主義』二〇〇五・二二、青弓社)を参照した。安岡は、座談会「屈辱体験からみた差別」(野間宏・大岡昇平・安岡、『朝日ジャーナル』一九七七・一・二八)にて、小松川事件にはさしたる関心を持たなかったと述べている。それは「朝鮮人の問題だから」であり、一方狭小事件とその裁判は、部落差別の問題でも

ある点で「自分自身にかかわりがあるかもしれない」から興味を抱いたという。安岡が朝鮮人差別の存在を知らないわけではなく、差別している自覚もあるようだが、その加害責任認識の希薄さは問題視されるべきである。

(17) 軍隊で胸を患った安岡は大阪陸軍病院にいた時期があるが、そこで国本イントンという在日朝鮮人兵士に出会っている。国本は胃潰瘍であったため、少量の粥しか与えられていなかった。耐えかねて残飯漁りをするようになる、その暴食が「わざと体をこわして兵役を忌避するため」だと周囲に解され、「彼が朝鮮人であること」と結びつけて考えられるようになったという（『僕の昭和史』一九八四・七、講談社）。安岡は国本に焦点を当てて「餓」（『聲』一九六〇・四）という小説を発表している。

(18) 財団フェローを受けた作家の創作では、阿川弘之『カリフォルニア』（一九五九・一一、新潮社）、小島信夫『異教の道化師』（一九七〇・一一、三笠書房）、有吉佐和子『非色』（一九六四・八、中央公論社）、『ぶえるとりこ日記』（一九六四・一二、文芸春秋社）などが留学体験を基に人種差別を描いている。一方安岡は「裏庭」（『群像』一九六一・一〇）で日系人差別も描いたが、「プリストヴィルの午後」（『文芸』一九六九・八）のような部落差別を主題とした創作にも接続した。同作は戯曲であるが、芥川比呂志「安岡さんと一幕物」（『安岡章太郎全集Ⅰ 月報』一九七

一・一、講談社）が述べているように、二人の男が「白人と黒人と黄色人種との間の差別の問題を話し合っているうちに、不意に話が、日本のいわゆる部落の問題に、燃えうつる」という筋である。芥川は同作の上演に携わった。

附記

『アメリカ』からの引用は岩波新書版に拠った。その他の安岡文献、参考文献はすべて初出に拠っている。『アメリカ』からの引用は（ ）で括弧、その他の引用は「」で括弧した。傍点・ルビ・文献副題は適宜省略し、引用中の（ ）は稿者による注を示すこととした。

（あんど・ようへい 本学大学院博士課程後期課程）